

6 3 3 1 - 1 2 2
平成 1 6 年 1 1 月 2 9 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除所長

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 8 号について
平成 1 6 年度病害虫発生予報第 8 号を発表したので送付します。

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 8 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
冬春キュウリ	べと病	並	2
	うどんこ病	並	2
	褐斑病	並	2
	灰色かび病	並	2
	アザミウマ類	並	2
冬春ピーマン	斑点病	やや少	3
	うどんこ病	並	3
	アザミウマ類	やや少	3
	コナジラミ類		3
冬春トマト	葉かび病	やや多	4
	斑点病	やや多	4
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)		4
	コナジラミ類	並	4
	ハモグリバエ類	並	4
冬春イチゴ	うどんこ病	並	5
	ハダニ類	少	5
	アブラムシ類	並	5
カンキツ類	ミカンハダニ	並	5
チャ	カンザワハダニ	やや少	5

11月中旬の冬春キュウリは収穫初期、冬春ピーマンは収穫期、冬春トマトは収穫前、冬春イチゴは収穫前、温州みかんはほぼ収穫終了、茶は秋整枝後であった。

1 2 月の気象予報

平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並か高い、降水量・日照時間は平年並と予想されています。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台 1 1 / 2 6 発表)

発生予報の根拠および防除対策

冬春キュウリ

1 ベと病（並）

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率22.2%（平年33.8%）、発病葉率1.90%（平年4.4%）は平並である。
- 2) 12月の気温は平年並か高い、降水量・日照時間は平年並と予想される。

[防除上の注意]

- 1) 湿度が高いときには多発しやすく、多発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病（並）

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率33.4%（平年44.8%）、発病葉率4.5%（平年6.8%）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- 3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病（並）

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率11.1%（平年15.6%）、発病葉率0.8%（平年3.5%）は平年並である。
- 2) 12月の気温は平年並か高い、降水量・日照時間は平年並と予想される。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 下葉の老化した発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

4 灰色かび病（並）

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 12月の気温は平年並か高い、降水量・日照時間は平年並と予想される。

[防除上の注意]

- 1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。
- 2) 発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

5 アザミウマ類（並）

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率0.0%（平年6.9%）、葉当り虫数0.0頭（平年0.3頭）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度の内に防除する。

冬春ピーマン

1 斑点病 (やや少)

[予報の根拠]

1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

1) 多湿条件では発生した場合の被害も大きくなるので、除湿に努める。

2) 病原菌が侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

1) 11月中旬の発生面積率27.3% (平年40.0%)、発病葉率0.7% (平年2.9%) は平年並である。

[防除上の注意]

1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。

2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

3 アザミウマ類 (やや少)

[予報の根拠]

1) 11月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率27.3% (平年55.9%) は平年より少、10花当り寄生虫数1.4頭 (平年2.1頭) は平年並である。

2) 11月中旬のヒラズハナアザミウマの発生面積率0.0% (平年31.9%) 10花当り寄生虫数0.0頭 (平年2.6頭) は平年より少である。

[防除上の注意]

1) ミナミキイロアザミウマは10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度の内に防除を徹底する。

4 コナジラミ類 (-)

[防除上の注意]

1) 近年、シルバーリーフコナジラミの発生が確認されており、多発するとスス病を併発し生育を妨げ、品質低下の原因ともなるので発生初期に防除する。

2) トマト黄化葉巻病ウイルス (TYLCV) を媒介し、ピーマンにも無病徴感染することが確認されていることから、病原ウイルスの密度低下を図るため、地域全体で防除の徹底に取り組む。

[その他] 黒枯病 (仮称)

[防除上の注意]

1) 高知県で発生が確認された新病害で、葉、茎及び果実が犯される。葉では初め褐色小斑点が形成され、次第に拡大して黒褐色輪紋状の病斑となることが多く、斑点病に似ている。茎、果梗及び果実にも黒褐色の斑点を生じることがある。

2) 本県でも、類似症状の発生が確認され、現在詳細について調査中である。

3) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともに敷きわら、マルチなどを行う。被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率11.1%(1.7%)、発病葉率0.1%(0.0%)は 年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 斑点病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率22.2%(5.0%)は 年より多、発病葉率4.9%(1.7%)は 年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (-)

[防除上の注意]

- 1) 11月中旬の巡回調査では9ほ場中1ほ場で発生が確認されている。
- 2) 黄色粘着トラップ等を設置し、シルバーリーフコナジラミ(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 3) ハウスには必ず開口部に0.8mm以下の防虫ネットを設置する。できれば、0.4mm以下の目合いが望ましい。
- 4) 施設内外の雑草はシルバーリーフコナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 5) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

4 コナジラミ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の巡回調査では9ほ場中3ほ場で発生を確認したが、いずれも葉当り虫数0.5頭以下の微発生であった。

[防除上の注意]

- 2) シルバーリーフコナジラミはトマト黄化葉巻病(前述)を媒介したり、激発するとすすの発生や果実の着色異常を引き起こす。多発すると防除が困難となるので早期発見につとめ、防除を徹底する。

5 ハモグリバエ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率44.4%(49.0%)は 年並、寄生葉率1.6%(5.0%)は 年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除効果は低いので初期防除に努める。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率25.0%(平成24.3%)、発病葉率4.0%(平成4.2%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2 ハダニ類 (少)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

3 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率25.0%(平成23.8%)、寄生株率1.7%(平成3.6%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

カンキツ類

1 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率51.8%(平成59.9%)、寄生葉率15.0%(平成20.3%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。
- 2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

チャ

1 カンザワハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 11月中旬の発生面積率26.7%(平成47.1%)、寄生葉率0.7%(平成4.3%)はやや少である。

[防除上の注意]

1) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

その他

1 防除上の留意点等については、「病虫害・雑草防除等指導指針」(宮崎県・宮崎県植物防疫協会)を参照するが、農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

(平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除所から発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。(従来の防除速報にあたる)

お知らせ(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除所では、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除所 櫛間

TEL : 0985-73-6670

FAX : 0985-73-7499

E-mail : ykusima@pref.miyazaki.jp